九州産業大学国際文化学部紀要　第11号　23―42（1998）

仮名文書の形容詞（二）

――高頻度形容詞「～がたし」、特に「申しつくしがたし」「つくしがたし」など――

辛島美絵

（一九九八年一月二十一日受理）

一　はじめに

本稿は、鎌倉時代における仮名文書の高頻度形容詞についての拙稿「仮名文書の形容詞（一）」[注1]の続編である。前稿[注1]の「なし」「おなじ」「かしこし」に続き、「～がたし」について報告、考察を行う。仮名文書の形容詞研究の目的や方法、テキスト、形容詞語彙一覧等については前稿を、古文書、仮名文書の国語学的研究の必要性や重要性については拙稿他[注2]を参照されたい。

二　「がたし」の上接語の多様性

仮名文書の形容詞中、頻度順の第四位を占めるのは、接尾語「がたし」が下接してできた形容詞[注3]である（前稿の〈別表2〉参照）。

仮名文書における「～がたし」についてまず注目されるのは、「がたし」に前接する上接語の多様性である。〈別表8〉に「がたし」の上接語を上げ、前稿〈別表2〉で取り上げた諸資料における「がたし」の上接語との関係を示しているので参照されたい。

「～がたし」は進藤義治氏の御論考[注4]により、王朝文芸文では「源氏物語」以降、上接語の種類も使用頻度も増大することが

明らかにされており、この傾向は〈別表8〉でとりあげた中世の諸資料においても同様に認められる（〈別表11〉の「がたし／接尾語」の欄も参照）。とすると、仮名文書における頻度と上接語の多様性も鎌倉時代という時代的な要素を反映したものと見ることが可能である。しかしながら、〈別表8〉でとりあげた上接語で、三分の一以上の見出し語が仮名文書のみで使用されていることや、全形容詞における「〜がたし」の使用比率が高いことには注目すべきで、中世資料の中でも仮名文書では特に「〜がたし」が好まれ、さまざまな語に下接して用いられたことは、その文体的特色として押さえておくべきだろう。

〈別表9〉の（A）欄と（B）欄は、調査した全文書数と「〜がたし」が見える文書数との関係を示したものであるが、「（B）／（A）％」欄を見れば、この語が特に書状で使用されたものであることが分かると思う。また（E）欄の上接語の異なり数も書状において卓越しており、仮名文書の「〜がたし」の頻度数の多さも、上接語の多様性も、主に書状によるものであることがわかる。

①かやうの事、しつまり候ハすハ、この御大事なりかたく候者也。

〈文治三（一一八七）年三月一日　重源書状　吾妻鏡文治三年四月一九日条　一巻二一〇号一三〇頁〉

②しかるをむなしく日月ををくりて、出離の行を決せず、止観弘決等を披見し候にも、三諦円融の義をしらすは、無始の悪業のそきかたく候歟。

〈「嘉禄二（一二二六）年一月」　後鳥羽上皇書状　法然上人行状画図四一　五巻三四五一号三八六頁〉

③抑参上仕候て、便宜を伺へく候へとも、中〳〵きけんもしりかたく存候て、内〻私に申合候。

〈建長二（一二五〇）年一月一三日　憲深書状土代　山城醍醐寺文書　一〇巻七一五六号一三一頁　写真〉

④ちよくめんの院宣にまかせて、あてかハの庄段米ハなすへからさるのよしの御教書を申させ給ひて、庄家に御ひろう候ハゝ、おうりやうの御沙汰に候へきに、無其義候て、庄家にて御い覧候條、存知しかたく候。

〈嘉元二（一三〇四）年一〇月九日　みついゑ書状　高野山文書寶簡集一六　二九巻二二〇一二号四二頁　影写〉

⑤上の御かくれ候御事、こハうきまいり候に申入候へく候しかとも、そこハかと申わきかたく、心もまよひさふらひしほとに、申まいらせす候し。

〈徳治三（一三〇八）年八月以降　某書状　金沢文庫文書三〇巻二三三四四号三〇五頁　写真〉

⑥御文悦入候て、うけ給ハり候了。まかりかたき事候て、たゝいま物へいて候。やかて返候へく候へハ、まいり候へく候。
〈年未詳二月八日　恵剣書状　尊経閣文庫蔵金沢文庫本古語拾遺裏文書　三二巻二四三五五号一五頁〉

⑦今は衰老の余命、旦暮期しかたきあひた、今生の見参、頼みかたきゆへに、再会しかしなから、浄土の対面たるへく候。
〈正和三（一三一四）年九月九日　他阿書状　相模清浄光寺蔵安食問答　三三巻二五二〇号四六頁〉

⑧（前欠）さゝれ候はん事は、ふひんの事に候。たゝし正成、かの庄所務あらためられかたき事に候はゝ、旧院より、まきのをに御寄附候土佐のくにあきの庄を、正成に賜候て、崐陽寺の庄は、もとのことく、…槇尾平等心王院につけられ候者、浄寶生前の朝恩に存候へく候。
〈年未詳　浄寶上人書状　山城西明寺文書　四一巻三二四五六号三四〇頁　影写〉

⑨南無阿弥陀仏と申さは、何なる大科有とも、念仏者にて無とは申かたし。
〈建治四（一二七八）年二月一三日　日蓮書状　一七巻一二九八三号二二〇頁　『昭定』二七四号一四四二頁〉

⑩國主も又、一には多人につき、或は上代の國主の崇重の法をあらため難き故、或は自身の愚痴の故、或は…の故、彼誑人等の語ををさめて、実教の行者をあためは、…先代未聞の三災七難起るへし。所謂、去今年、去正嘉等の疫病等也。
〈弘安元（一二七八）年六月二六日　日蓮書状　一七巻一三〇九四号二八九頁　『日真蹟』三巻三〇頁〉

⑪設い大鬼神のつける人なりとも、日蓮をは梵釈・日月・四天等、天照大神・八幡の守護し給ゆへに、はつしかたかるへしと存給へし。
〈弘安二（一二七九）年一〇月一日　日蓮書状　一八巻一三七二七号二三〇頁　『日真蹟』三巻一三八頁〉

右のように、さまざまな上接語に下接して用いられているが、差出人別に見れば、特に日蓮のものに「～がたし」が多用される傾向が顕著である（〈別表10〉参照）。

また、書状以外では

⑫去年十月中に、させるとかなきに、御代官職をさへめしあけられ、別人にあて給間、忍西か親父六郎をもてなけき申之處に、観西不便におほしめされしうへ、故御局の御下文、同御書等もたしかたき上は、春ゐ中へ御下の時、明智御房に別の所をあつけまいらせ、彼職をは返給はるへきよし仰をかふる間、…

〈元亨四（一三二四）年九月　忍西申状　加賀大野湊神社文書　三七巻二八八三九号二一四頁〉

⑬モシカナヒカタクンハ、ソレカシカウンメヒヲトトメテ、後生ヲタスケテタヒヲワシマス□□□ヤ。

〈文保二（一三一八）年二月一九日　某立願文　和泉河野家文書　三四巻二六五五七号三一七頁　写真により「ウンメイ」を「ウンメヒ」と改む〉

⑭為違乱輩有者、罪科のかれかたかるへし。

〈正応六（一二九三）年八月一五日　紀伊柏原御堂結衆置文　紀伊西光寺文書　二四巻一八三〇五号三三頁〉

のごとく、申状、願文等々で使用されている（〈別表10〉参照）[注5]が、これらの文書においても上接語の偏りは見いだせない。すなわち、上接語によらず「がたし」のもつ表現性が書状を中心とする仮名文書で好まれたものと思われる。

「がたし」は〈上接語の動作が困難である〉ことを表すが、仮名文書における例の多くは〈動作がむずかしい〉という状態そのものよりも〈むずかしい〉ことから結果として発生する〈できない〉という否定の方が伝達の主眼となっている。上の①は〈大事が成るのがむずかしい〉といいたいのではなく〈大事は成らない〉という意味であり、②も〈除くのがむずかしい〉状態を知らせたいのではなく〈除けない〉というのであり、以下、同様に⑭の〈逃れられない〉まで、みな結果として〈〜できない〉ことを相手に予想させる表現である。このような「〜がたし」の意味を利用した婉曲ともいうべき表現形式――〈〜できないこと〉を「ず」他の明確な否定形式で表現せずに〈むずかしい〉と表現する――は数多く指摘できる。書状の多くは、知人同士で私的にやるとりするもので、内容が証拠能力を持つような公的な文書とは異なるため、曖昧な表現の入り込む余地が大きい。また個人として相手に直接的に相対するために、会話と同様の相手への配慮が用語や文章に必要となってくる。書状のもつこのような私的かつ直接的な性質が、婉曲的表現としての「〜がたし」の多用につながった一因ではないかと推察される[注6]。

一方、このように否定的な「〜がたし」が、

⑮ウケカタキ人身ヲウケテ、アヒカタキ本願ニマウアヒ、オコシカタキ道心ヲオコシテ、ハナレカタキ輪廻ノ里ヲハナレ、ムマレカタキ浄土ニ往生セムコトハ、ヨロコヒノ中ノヨロコヒナリ。

〈建永元（一二〇六）年六月以前　法然書状　西方指南抄　三巻一六二一号二七九頁　『親真蹟』六巻七二一頁〉

⑯およそ人身をうくる事、浮木よりもまれなり。仏法にあふ事、曇花よりもかたし。いまうけかたきをうけ、あひかた

きにあへり。

〈弘長二（一二六二）年六月二五日　行清立願文案　石清水文書　一二巻八八二五号二〇〇頁　写真〉

⑰しかるに日蓮はうけかたくして人身をうけ、値かたくして仏法に値奉る。

〈弘安元（一二七八）年七月二八日　日蓮書状　一七巻一三一三四号三一五頁　『日真蹟』三巻四八頁〉

の二重傍線部の如くに実現された場合には、〈不可能に近いことができた〉という意味になり、上接語の動詞の実現が強くアピールされる。このような強調文は右のような仏教関係の内容においてよく見られる。

また逆に、実現が不可能ではないこと、すなわち〈上接語が感情・精神面に関わり、個人の意志で調整可能なこと〉にあえて「〜がたし」を用いた場合は、

⑱一々の事、皆以不思議の境界なり。なを感涙禁しかたき歟。

〈建永二（一二〇七）年四月以前　九条兼実書状　法然上人行状画図二七　三巻一六六五号三〇九頁〉

⑲この御製にいかて人丸か歌も、かたはらたへかたくきこへぬへくや候らん。

〈［建保四（一二一六）年］　藤原家高書状　玉言抄　四巻二二二三号二一〇頁〉

⑳なにとなけれとも、我か國はこいしき上、妻子ことにこいしく、しのひかたかりしかとも、ゆるす事なかりしかは、かへる事なし。

〈弘安三（一二八〇）年七月二日　日蓮書状　一八巻一四〇一〇号三七八頁　『日真蹟』五巻一八頁〉

のように、〈とても〜できない〉といった誇張表現を形成することになる。「こらえ」「しのび」「たえ」「わすれ」等の上接語を持つものがこれに属するが、この類も少なくない。そして、「〜がたし」による誇張表現の代表ともいえるのが、次節で述べる「もうしつくしがたし」である。

三　「もうしつくしがたし」

「もうしつくしがたし」は、仮名文書の「〜がたし」の中で一番多用される語形であり、そのほとんどが書状に集中して用いられる（〈別表12〉参照）。このうち七例は、

①なによりもゑもんの大夫志ととのとの御事、ちゝの御中と申、上のをほへと申、面にあらすは申つくしかたし。恐〻謹言。

〈弘安元（一二七八）年一一月二九日　日蓮書状　一八巻一三二九九号二九頁　『日真蹟』四巻二九五頁〉

②よろつ申つくしかたく候てとゝめ候ぬ。
〈〔正安四（一三〇二）年〕　某書状　金沢文庫蔵汀口伝行海流裏文書　二八巻二一二四六号六三頁〉

などのように書状の末尾で用いられており、後述する「つくしがたし」と同様に、手紙を書きやめるときの定型句的用法と考えられるので、四節で一緒に取り扱う。

これ以外の「もうしつくしがたし」はすべて、感謝や苦悩などの〈書手の心情・感情について、その程度が甚だしくて言葉では表現しきれない〉ことをいうもので、二節で言及した誇張的用法に繋がるものである。用例は、親鸞や日蓮くらいから鎌倉末の金沢貞顕の書状まで年代的にも幅広く採取できる。

③罪悪ノ我等カタメニオコシタマエル、大悲ノ御誓ノ目出タク、アワレニマシマス、ウレシサ、コヽロモオヨハレス、コトハモタエテ、申ツクシカタキ事、カキリナク候。
〈〔正嘉二（一二五八）年〕一〇月一〇日　慶信書状　下野専修寺文書　一一巻八二九六号三〇一頁　『親真蹟』四巻四一四頁〉

④…に値べしと、仏記しをかれまいらせて候事のうれしさ、申尽難く候。
〈弘長二（一二六二）年一月一六日　日蓮書状　一二巻八七六一号一五二頁　『昭定』二八号二三六頁〉

⑤（前欠）をろかなる御事になり候ぬる心もとなさ、申つくしかたく候。
〈正安四（一三〇二）年九月以前　某書状　金沢文庫蔵汀口伝良勝流巻六裏文書　二八巻二一二五二号六四頁〉

⑥兼又今始御事に候へとも、ひほし給候御志、申尽かたく存候。
〈年未詳四月一九日　覚道書状　厳島神社反古経文書　二九巻二二六三五号三五二頁〉

⑦白米一斗御志申つくしかたう候。鎌倉は世間かつして候、僧はあまたをはします、過去の餓鬼道苦をはつくのわせ候ひぬるか。
〈文永七（一二七〇）年一二月二二日　日蓮書状　一四巻一〇七五八号二〇六頁　『日真蹟』四巻九一頁〉

⑧又其後の世中のことゝも、世のさためなさも、ことに思ひしられ候御事にて候つる、申つくしかたくをとろかれさせおハしまして候へとも、
〈〔嘉元三（一三〇五）年四月〕　円信御房宛某書状　金沢文庫文書　二九巻二二一七三号一二四頁　写真〉

⑨なを〳〵、長老の御心くるしさ、申つくしかたくおほえておはしまして候。

〈年未詳　某書状　猪熊信男氏旧蔵薄草紙口決裏文書　一八巻一三三六〇号五四頁〉

⑩（前欠）十四日にほかへ御わたりにて候。いとゝこ殿の御なこりなさも、あはれに申つくしかたく候。

〈「正安三（一三〇一）年」　某書状　金沢文庫文書　二七巻二〇七五二号二八五頁　写真〉

⑪身延沢を罷出候事面目なさ、本意なさ難申尽候へとも、打還案し候へは、いつくにても聖人の御義を相継進て、世に立て候はん事こそ、詮にて候へ。

〈正応元（一二八八）年一二月一六日　日興書状　興尊全集二二巻一六八二七号一三四頁〉

右のように用いられており、波線を付したのが「もうしつくしがたし」の対象となる感情である。⑥⑦は感情を表す語は書かれてないが、「こころざし、もうしつくしがたし」は品物をもらったときの書状におけるお礼の常套表現で、品物への感謝の念について「もうしつくしがたし」といったものと解釈できる。〈別表13〉には、仮名文書の「もうしつくしがたし」の全用例について、その対象となる感情を挙げているので参照されたい。喜びや、不安、驚き等々の様々な感情に関して使用されているのが分かると思う。この語形の本来の意味は〈言い尽くすことはむずかしい〉であるが、相手に伝えたいのは、〈表現を行うことがとてもできないほど～だ〉という感情の程度の甚だしさである。

さて、「もうす」も「つくす」も「がたし」もありふれた単語であるが、「もうしつくしがたし」は古文書以外の文献では意外に少ない。そこで、類似の表現である「いいつくしがたし」「いいつくすべからす」や「いいつくすべうもあらず」「いいつくさむかたなし」「いいつくすべきかたもなし」等々――これらは中古・中世を通じて日記、随筆、説話、物語などで数多く使用されている――も含めて諸資料における使用状況を見ると、

⑫加之、唐帝ノ楊貴妃ニ別レシ恨ハ、長恨歌ト云文名ニオイテキコユ。漢皇ノ李夫人□ヲクレシ恨、イカハカリナリケン。…。凡イモセノ中ノ恨アサカラヌタメシハ、云ツクシカタシ。

〈古典文庫版『十訓抄』下　八九頁〉

⑬六条の大殿ゝ君だちなど、僧も多くおはすれど、さのみ申つくしがたし。

〈笠間書院刊『今鏡本文及び総索引』むらかみの源氏　第七二二八頁〉

のように文字通りの〈事柄が多いので、すべてを挙げ尽くすことができない〉というものや、

⑭身をかへて天人などはかやうやあらんとみゆる物は、たゞの女房にてさぶらふ人の御乳母になりたる。…、女房どもをよびつかひ、局にものをいひやり、文をとりつがせなどしてあるさま、いひつくすべくもあらず。

〈岩波書店刊『新日本古典文学大系　枕草子』二二八段　二七〇頁〉

⑮秋ごろ、和泉にくだるに、淀といふよりして、道のほどのおかしうあはれなること、いひつくすべうもあらず。

〈岩波書店刊『新日本古典文学大系　更級日記』四二六頁〉

のように〈言葉で表すことができないほどのありさまだ〉と、〈状態〉を誇張的に表現するもの、また、

⑯我身のありさま、みづから語りけるは、「…心の中の悦び、申つくすべからず。…」

〈清文堂刊『発心集　本文・自立語索引』第八ノ九　二三二頁〉

のように、〈感情〉を誇張するものなど様々である。

ただ、全体的な特色として看過できないのは、これらの語が会話文（あるいは、それに準ずる対話形式の文）で使用されたときには、ほとんどが発言者の〈感情〉を誇張するために用いられていることである。同時に、仮名文書と同様の「もうしつくしがたし」という語形も増える。

まず、会話文中に用いられた「もうしつくしがたし」の例としては、『義経記』に、

⑰法眼が申けるは「…彼奴を切つて首を取つて給り候はば、今生の面目申尽しがたく候」とぞ申されける。

〈岩波書店刊『日本古典文学大系　義経記』巻第二　九〇頁〉。

⑱佐殿涙を抑へて「…。兄弟ありと思召し忘れ候はで、取敢へず御上り候事、申尽し難く悦び入候。…」

〈同書　巻第四　一四〇頁〉

の二例が見えるが、⑰は法眼が義経に「義経が自分のために湛海の首を取ってくれたら感激だ」という部分であり、岩波大系には「一生涯の中でもっとも晴れがましい事に思います」と頭注がある。⑱は頼朝が義経に向かって彼が来てくれた悦びを表現している部分で、二例とも感情を誇張して表現した例と考えられる。また、『延慶本平家物語』や『御伽草子』にも、

⑲座主ハ大ニ怖給テ…ハシ近ク居出テ宣ケルハ「…、世ヲモ人ヲモ神ヲモ仏ヲモ、更ニ恨奉ル事ナシ。是マテ訪来リ給ヘル衆徒ノ芳心コソ申尽シガタケレ」トテ、涙ニ咽給フ。

〈勉誠社刊『延慶本平家物語　本文篇上』第一末「山門ノ大衆座主ヲ奉取返事」一一六頁〉

⑳姉が申やう「仰せの如く、一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むも、皆他生の縁とこそうけ給り候へ。…。ことさら御経あそばして給はり候事、申つくしがたく候。」といひしも果てず、袂を顔に押し当てゝ、声も惜しまず泣きゐたり。

〈岩波書店刊『日本古典文学大系　御伽草子』「三人法師」四五三頁〉

などの用例があるが、⑲は、座主から衆徒へ、座主の衆徒に対する感謝の思いを表現したもの、⑳は姉から僧へ、僧が御経をあげてくれたことに対する感謝の念を述べたもので、いずれも感情を誇張し、涙の中、感動して語られている場面である。

「もうしつくしがたし」と類似した表現の場合も、会話文や和歌などのように相手に直接語りかける性質を持つ文献においては、

㉑「君ハ何コニ御スル人ニカ、何デカ此ノ喜ビハ可申尽キ」ト云ヘバ、

〈岩波書店刊『日本古典文学大系　今昔物語集三』巻第一六第一八話　四六一頁〉

㉒「これ、あのおとこに取らせよ。この柑子のよろこびは、言ひ尽すべき方もなけれども、かゝる旅にては、うれしと思ふばかりの事は、いかゞはせむずる。…」といひて、

〈風間書房刊『古本説話集総索引』巻下第五八　一八九頁〉

㉓かなしさはいひつくすべきかたもなしわがこころにて人をしらなむ

前大納言成通

〈角川書店刊『新編国歌大観』「続新古今和歌集」巻一六　一四三〇番〉

㉔いかにいひいかにいはばか嬉しさのみにおふ袖にいひつくすべき

宮内権少輔行能

〈角川書店刊『新編国歌大観』「源家長日記」二八番〉

㉕女院ハ「…。其ニ付テモ、今日ノ御幸コソ可然善知識ト、ウレシク候へ。送日重夜トモ不可申尽。既ニ日クレ侍リヌ。トク〳〵還御ナルベキ」ヨシ申サセ給。

〈勉誠社刊『延慶本平家物語　本文篇下』第六末「法皇小原へ御幸成ル事」五三一頁〉

㉖「いかなる事をか愁ふる」と問へば、「我、かたわに罷り成にし後、…。とにかくに身のくるしさ、申つくすべき方なし。…」

〈清文堂刊『発心集　本文・自立語索引』第四ノ二　九七頁〉

のように、ほとんどが〈心情や感情、感覚〉を強調するために使用されている。すなわち、人が人に相対して、ある状態

を〈言葉では表現しきれない〉と形容するときには、自分の状態、すなわち自分の〈気持ちや感覚〉を強調する場合が多いと考えられそうである。

そうしてみると、「もうしつくしがたし」が書状において〈感情の誇張表現〉として多用されているのは、この語が本来そのような意味を持っていたのではなく、発言の場が書状であったからこそ、

(1) 相手に強調しなくてはならない〈状態〉が〈自分の心情・感情〉であった。

(2) 相手に発言するための動詞は「いう」ではなく「もうす」だった。

(3) 二節で述べたように書状では「がたし」が好まれた。

等の事情が介在し〈その結果として必然的にこの形が感情表現に多用された〉と考えたほうがよさそうである。つまり、「もうしつくしがたし」は、書状という場で心情・感情の程度を相手に強く伝えるために好んで使用された表現形式、さらに言えば、書状という場が要求した誇張的感情表現形式だった、ということになる。

⑬のような例、また四節で述べるような書状末尾の文句としての用法等のように「もうしつくしがたし」が〈感情の誇張〉以外で用いられることも勿論あるわけだが、諸文献中、とくに書状で多用される当時の状況を考えるに、この複合語が〈書状（や対話）特有の感情誇張表現である〉とする認識が人々にあったのではないかと推測される。また、この語形自体『平安遺文』[注7]をはじめとする中古の資料には見いだしがたいことからして、中世語的性格を有していたと見ることができそうだ。

四　「つくしがたし」

「もうしつくしがたし」とならんで多用されるのは「つくしがたし」である。これもほぼ書状に限定して用いられており（〈別表12〉参照）、ほとんどは手紙の末尾で、その手紙を書きやめる理由として使用されている。[注8] すなわち、

①なにことも御ふみにつくしかたく候て、とゝめ候ぬ。又もとよりのことり、七こやしなはせて候。

五月十三日（花押）

〈文永元（一二六四）年　恵信尼書状　山城本願寺文書　一二巻九〇九五号三四一頁　写真　『恵信尼文書の研究』図版第一一〉

②□候へとも、さのミはつくしかたく候て、とゝめ候ぬ。

十月一日

〈年未詳　金沢貞顕書状　金沢文庫文書　三〇巻二三三四五号三〇七頁　写真〉

③かたはらへは、あすのほとにいて候へく候。いかさまにもいきまいらせ入たく候。文に御つくしかたく候へく候。かまくらの事に候とて、よろつ申され候。あなかしく。返事ほかに候ぬるを、心もとなくおほえまいらせ候。

〈年未詳　某書状　猪熊信男氏旧蔵薄草紙口決裏文書　一八巻一三三六二号五四頁〉

④事つくしかたし。恐〻謹言。

弘安元年十一月一日　　日蓮花押

九郎太郎殿御返事

〈弘安元（一二七八）年一一月一日　日蓮書状　一八巻一三二四四号八頁　『昭定』三一七号一六〇四頁〉

⑤このやうを可有御物語候歟、諸事難尽紙上候。子細併期後信之時候。恐〻謹言

〈嘉元二（一三〇四）年六月二五日　正恵書状　金沢文庫文書　二八巻二一八七七号三五四頁　写真〉

の如くであり、「手紙では表現しきれないので、もう書くのをやめる」、「手紙では表現しきれないので、会ってから話す」等の意味である。

これらは、差出人の身分や性別・地域を問わず、偏りなく用例が存在しているので、当時、仮名書きの書状の末尾付近で用いられた、手紙を書きやめるときの定型的、形式的な文句だったと推察される。三節の最初に言及した「もうしつくしがたし」七例もこの変形と考えてよかろう。上申文書にみられる二例も

⑥又知宇地乃物共仁散〻仁被詈天候事奈牟登波、御文仁天難尽候江波、参候天細仁可申候。入道覚円在判

〈嘉元三（一三〇五）年三月　峰貞陳状案　肥前青方文書二九巻二二一五六号一一二頁　影写〉

のような陳状中に書状が引用された部分に見えるものと、

⑦よろつ御ふミにハつくしかたく候。御こゝろへ候て、よく〳〵申さ□給へく候。あなかしく〳〵。

十二月廿六日　　あきのゐより

すひりやうの御ハうへ

〈文永一〇（一二七三）年　藤原氏女申状　東寺百合文書ル一五巻一一五〇七号二二一頁　影写本により「ハ」を補う〉

のような書状形式の申状に見えるもので、右と同類である。

このような定型的な末尾の形式が仮名書きの書状に定着した時期は不明だが、用例が採取できるのは鎌倉時代からである。ただし、漢字書きの書状においては⑤のような漢文的語形が、『平安遺文』所収の書状と、『高山寺古往来』に

⑧委細者難尽紙上。恐〻謹言。

七月十九日　　僧「理真」

〈「保元二（一一五七）年」僧理真書状　東南院文書六ノ六九巻四七五三号三七二九頁〉

⑨諸事難尽紙上。恐〻謹言。

七月十五日　　僧円印

〈仁安元（一一六六）年　僧円印書状　陽明文庫所蔵兵範記仁安二年夏巻裏文書　九巻四八一七号三七五六頁〉

⑩然而付今仰、粗令注載折紙進之。委細之旨、難尽紙上。恐〻謹言。

九月一日　　参議長方（花押）

〈「院政期」九月一日　参議藤原長方書状　東京国立博物館所蔵高山寺文書　一一巻補四二七号三五三頁〉

⑪諸非面難尽不具謹言

〈東京大学出版会刊『高山寺資料叢書第二冊　高山寺古往来』第三一四～三一五行　九七頁〉

⑫諸事雖繁多紙上難尽、併期拝謝而已謹言

〈同右第三五一～三五二行　一〇三頁〉

の如く見えている。また、「つくしがたし」ではなく「つくさず」の語形でも、同じく『高山寺古往来』や、『雲州往来』に

⑬自以所催雖多諸事不尽紙上

以一照万恐〻謹言

〈同右第二〇〇～二〇一行　七五頁〉

⑭万事在面不レ尽二単紙一某謹言

〈宮内庁書陵部蔵雲州往来　勉誠社文庫五〇頁〉

⑮書不レ尽レ言、併在面展某謹言

〈同書四一頁〉

のような例が見られる。

この中でも特に⑮の語形は、『万葉集』巻五の七九三番の「太宰帥大伴卿報凶問歌一首」の前文に見える

⑯筆不尽言、古今所レ歎

〈『西本願寺本万葉集』巻五の三丁ウ〉

との繋がりを想起させる。この前文は書簡文と見なされており、⑯もその末尾にあたる部分なのである。

『万葉集』のこの例については、『万葉代匠記』以来、『易経』（繫辞上）の

⑰子曰　書不尽言　言不尽意　然則聖人之意　其不可見乎

〈『十三経注疏本周易正義』による〉

をふまえたとする説が一般的だが、小島憲之氏は、この類の語句が中国の書翰文の結びの常套語であることを指摘されている。ただし、次句「古今所歎」の存在を鑑みて、〈旅人が中国の書状の形式に倣った〉とすることには慎重な態度をとっ

ておられ、あわせて〈旅人自身が『周易』のことばとしては知っていても書簡の結びにも使われる文句だということを知らなかった可能性〉、また〈編纂者が「筆不尽言」を手紙の末尾の文句と気付かなかった可能性〉も指摘されている。

しかし、同じく奈良時代に光明皇后により書写された『杜家立成雑書要略』(注10)にも、

⑱謹此脩問。豈尽寸心。
⑲悽恨在心。書豈能尽。
⑳謹附寸誠。書豈能尽。
㉑欲述襟懐。非面何尽。

のような結びの文句が見出される。本書が中国から伝わった書儀であることを考えれば、このような末尾の形式が当時の我が国で知られていたとしても不思議はない。特に㉑などは⑪の『高山寺古往来』や三節の①の日蓮書状の例他と酷似した語形である。これに加えて、正倉院文書続修第四八巻の秦家主啓状では

㉒想心雖万端、不能書具載、伏乞部下消息、迤曲投一封、死罪頓首謹言

四月廿日下愚秦家主上

道守執下

〈年未詳　『正倉院古文書影印集成六』(注11)三〇五頁〉

のようにやはり書状の末尾に類似の表現が見え、さらに、『続日本紀』巻三六の宝亀一一（七八〇）年六月条には、末尾の形式ではないが、

㉓何経数旬絶無消息。宜申委曲。如書不尽意者。差軍監已下堪弁者一人。馳駅申上。

〈『新訂増補国史大系続日本紀』後編　四六一頁〉

の如く〈手紙では表現できない〉という同様の認識が示されている。このようなことを考え合わせると――旅人の直接の典拠が何であれ(注12)――、前掲のような書状末尾の形式的な文句が、奈良時代からしばしば人々の目にふれ、倣われ、平安・鎌倉時代へと受け継がれていった可能性は極めて高いと思われる。もちろん、平安以降に将来され、受容された書状類の存在がこの形式の定着に貢献したであろうことも想像に難くない。中国では宋はもちろん近代に到るまで類似の結びの文句は使用され続けており(注13)、『雲州往来』も唐に流行した書儀類の影響によって作られたことなど、すでに指摘されている(注14)とおりである。

いずれにせよ、鎌倉時代の仮名文書における「つくしがたし」は『易経』の「書不尽言」がもとになって中国で書信の結びとして慣用的に使われ出したものが源流であると考えることに異論はなかろう。まずは漢文や変体漢文の書状におい

て定着し、しかる後に――「書」「紙上」などの漢文的語句を「ふみにはつくしがたし」などのように和文的な表現に形を変えつつ[注15]――一般化していったものと推察される。

〈書状では表現できない〉という意味、また言外の〈詳しいことは実際にお会いしたうえで〉という意味をもつ句が形式として成立したところに、文書自体の存在が有意義である下達文書や上申文書などの公文書や証文とは異なる私信ならではの特質を見ることができる。

五　まとめ

仮名文書の「がたし」は様々な上接語について書状を中心に数多く使用されていること、「がたし」のもつ婉曲的表現性や誇張的表現性が書状で好まれたと考えられること、また、感情を強調・誇張する表現として「もうしつくしがたし」が好んで用いられたこと、「つくしがたし」が書状の末尾の定型句として使用されていること、その源流が中国の書状の形式にあること等について述べた。

漢字書きの文書に「難」で表現される「〜がたし」は非常に用例が多く、『平安遺文』や、『小右記』『御堂関白記』他の中古の記録類にも多くの用例が拾える。「〜がたし」は鎌倉時代の仮名文書では書状を中心に見られたが、そのことと、これらの記録や漢字書きの古文書における「難」との関係、また、鎌倉時代以降の「もうしつくしがたし」「つくしがたし」の使用状況等、残した問題も多いが、いづれ稿を改めて検討したい。

次稿では「〜がたし」に続く高頻度語として仮名文書における「ながし」「くわし」の用法について述べる予定である。

（注1）「仮名文書の形容詞（一）―高頻度形容詞「なし」「おなじ」「かしこし」―」（『九州産業大学国際文化学部紀要』一〇　一九九七年一一月）。以下、本文中で「前稿」というときは、この論文を指す。なお、本文中の用例やその出典の引用形式ほかの書式は、すべて前稿に準ずる。

（注2）「古文書による国語史研究序説―『豊太閤真蹟集』について―」（『文献探究』一二　一九八三年七月）、「古文書語彙の性格―副詞を中心として―」（『語文研究』五七　一九八四年六月）、「国語資料としての仮名文書―鎌倉時代のオ段長音の開合と四つ仮名の混乱表記を通して―」（『国語学』一四六　一九八六年九月）、「国語資料としての仮名文書―鎌倉時代の二段活用の一段化例、ナ変の四段化例等をめぐって―」（『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』　桜楓社　一九八九年六月）、「国語資料としての仮名文書―助動詞をめぐって―」（『古代中世史論集』吉川弘文館　一九九〇年八月）、「古文書における『る・らる（被）』の特色」（『語文研究』七一　一九九一年六月）。「仮名文書の助動詞―「す・さす」「しむ」―」（『九州産業大学教養部紀要』三〇ノ二　一九九三年

一二月）。また、仮名文書については、迫野虔徳「方言史料としての古文書・古記録」（平山輝男博士還暦記念会編『方言研究の問題点』　明治書院　一九七〇年八月）、同「古文書にみた中世末期越後地方の音韻」（『語文研究』三二　一九六六年一〇月）、福田良輔「方言と古文書」（『解釈と鑑賞』三四ノ八　一九六九年七月）他も参照。

（注3）形容詞の研究としては、「がたし」の下接する諸語について個別に見出し語をたて、それぞれ別の形容詞語彙素として考察すべきかもしれないが、本稿では「〜がたし」を持つ形容詞が以下の本文で述べるような傾向を持って仮名文書に使用されていることに注目し、仮名文書の語学的考察という立場から一体として扱った。

（注4）「王朝文芸文の『かたし』の接尾語的用法について」（『アカデミア』文学・語学編　二四　一九七七年二月）

（注5）〈別表10〉の文書の細分類は『鎌倉遺文』の文書名をもとに『日本の古文書』（相田二郎著　岩波書店　一九四九年）、『古文書学入門』（佐藤進一著　法政大学出版局　一九七一年）他を参考にして行ったものである。しかし、国語学的な性質と文書の種類との関係を見ようとするとき、各用途や形式と言語との相関性の究明が途中である現在、このような細分がどこまで有効なものか、いささか疑問が残る。よって〈別表10〉の細分類における数値は、あくまで後考のための参考として見るべきものである。

（注6）類義語に「〜にくし」があるが仮名文書には用例数は少ない。〈別表11〉の下段に諸資料における用例数を示したが、他の資料でも「〜がたし」に比較して用例は多くない。しかし「〜にくし」は、仮名文書においても、動作の困難な状態そのものを表現する

この書夜かきて候間、御覧しにくゝ候はんす覧。

〈「貞応三（一二二四）年」七月一二日　行慈書状　山城神護寺文書五巻三二五九号二八六頁　影写〉

のような例も見出される。「〜がたし」と「〜にくし」の運用上の相違については、別の機会に詳しく考察したい。

（注7）竹内理三編、東京堂出版、一九七一〜九一年刊。『平安遺文』には似た表現として

①凡世間之無常□（不カ？）可申尽候事也。恐〻謹言。

〈保延二（一一三六）年一〇月二二日　明□書状　造興福寺記裏文書一〇巻四九九五号三八七〇頁　写真〉

②尚〻此条御恩之至、不可申尽候。

〈「養和二（一一八二）年」四月一二日　僧某書状　金剛寺文書　八巻四〇二〇号三〇五八頁　写真〉

等の「不可申尽」がやはり書状を中心に七例（平仮名交じり書状に三例、漢字書き書状に二例、申状・解に各一例）見出される。

（注8）「つくしがたし」のうち

①…たん王の阿志仙人につかへしかことくして、一月に及ぬる不思議さよ、ふてをもちてつくしかたし。

〈弘安元（一二七八）年四月一二日　日蓮書状　一七巻一三〇一九号二四九頁　『日真蹟』四巻二二六頁〉

②尽せぬ志、連〻の御訪、言を以て尽しかたし。

〈弘安三（一二八〇）年一〇月八日　日蓮書状　一九巻一四一二六号八七頁　『昭定』三八四号一七九九頁〉

等の五例は、〈筆を以て〉〈言を以て〉等の語とともに文中で使用されている。これらは前節で取り上げた誇張表現の部類と見るべきと思われる。三節参照のこと。

（注9）「大伴淡等謹状」（『万葉』七四号　一九七〇年一〇月）において、晋の陸雲の啓他の書簡の結びにおける諸例を挙げておられる。

（注10）神野富一「杜家立成雑要略・本文と索引」（『水門』一五号　一九八六年）による。

（注11）宮内庁正倉院事務所編、八木書店刊、一九九三年。なお同文書は、東京大学出版会刊『大日本古文書』二五の三四四頁に翻刻がある。

（注12）小島氏の他にも七九三番の前文については、蔵中進氏のように直接の出典は初唐の駱賓王の書（たとえば「与博昌父老書」の末尾の「…

以此懐労増其歎息情不遺　書何尽言意」など）と見る説（有精堂『万葉集講座』第三巻所収「万葉集と散文」　一九七三年）や、芳賀紀雄氏（学燈社刊『万葉集事典』所収「万葉集比較文学事典　書儀・尺牘類」一九九四年）のように七九三番歌の前文自体が唐の杜有晋の『書儀』に代表されるような、なんらかの吉凶書儀の影響をうけたものと見る説などがあり、旅人が自覚的に「筆不尽言」を使用した可能性は高い。

（注13）和泉新・佐藤保編『中国故事成語大辞典』（東京堂出版　一九九二年）の「書不尽言」の〈意味〉の項目には「文章の中にいうべきことが完全には表されていない。後世、書は書信の意味に用いられ、手紙の結びの語として慣用句となった。」との説明があるが、たとえば、小島憲之『上代日本文学と中国文学』中（一九六四年　塙書房）七七八頁に挙げられている、四世紀初頭の楼蘭出土李柏文書（龍谷大蔵）の「書不悉意」「書不尽意」や、『文選』第二〇巻、謝宣遠「王撫軍庾西陽集別一首」の末尾の

①誰謂情可書　尽言非尺牘（誰か謂ふ　情書す可しと　言を尽くすは尺牘に非ず）

〈集英社刊『全釈漢文大系28文選三』一六七頁の訓読による〉

などは、『易経』にいう「書」が「手紙」と通用して用いられている例といえようか。また、宋代における書状の結びとしての用例としては蘇東坡の「荅宋寺丞書一首」の末尾の

②…當有以告我者不勝大願適會夫役起無頃刻間暇、書不能盡意惟、深察之。

〈汲古書院刊『東坡集』　書陵部蔵宋刊本　巻二九　三三七頁下段〉

などが挙げられる。

（注14）『雲州往来』が唐に流行した書儀類の影響によって作られたと考えられることについては川口久雄『三訂平安朝日本漢文学史の研究』下（一九八八年一二月　明治書院）の七九六頁他参照。

（注15）書状末の「つくしがたし」三四例の中、⑤のように「紙上に」等の漢語を含む形は一〇例、それ以外の「ふみに」「かみに」等を含む形が一〇例、単なる「つくしがたし」が一四例である。

【付記】本稿は、平成九年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）「中世仮名文書の国語史的研究―形容詞・形容動詞の調査から―」の成果の一部である。

また、古文書の写真や影写本、「平安時代フルテキストデータベース」の閲覧に際し御高配を賜りました東京大学史料編纂所に厚くお礼申し上げます。

【正誤表】前稿において以下の文字と数字が誤っていました。お詫びを申しますと共に、訂正をお願いします。

頁	該当個所	誤	正
8頁	上段4行目	＼	影写＼
15頁	下段18行目	佐竹昭宏	佐竹昭広
20頁	（注15）		
21頁	＜別表1＞「おびたたし」欄の「証文」欄	1	0
21頁	＜別表1＞「おびたたし」欄の「書状」欄	19	20
22頁	＜別表1＞「がたし／接尾語」欄の「証文」欄	30	29
22頁	＜別表1＞「がたし／接尾語」欄の「書状」欄	377	378
23頁	＜別表1＞「合計」欄の「証文」欄	1900	1898
23頁	＜別表3＞「全形容詞延べ語数」欄の「証文」欄		
23頁	＜別表1＞「合計」欄の「書状」欄	7919	7921
23頁	＜別表3＞「全形容詞延べ語数」欄の「書状」欄		
24頁	＜別表2＞「がたし／接尾語」欄の「軍記」欄	95　1.17　17	99　1.15　16
24頁	＜別表2＞「全形容詞延語数」欄の「軍記」欄	8586	8590

〈別表８〉

上接語	意味	鎌倉遺文用例数 全519例	鎌倉遺文 %	右A用例数計 全745例	右A %	A：〈別表２〉の他資料用例数 日記中世 全47例	随筆中世 全33例	説話中世 全125例	軍記中世 全99例	日記中古 全27例	随筆中古 全３例	史書中古 全14例	物語中古 全397例
もうしつくし	申尽	42	8.1%	2	0.3%	0	0	0	2	0	0	0	0
つくし	尽	39	7.5%	6	0.8%	0	0	0	6	0	0	0	0
のがれ	逃	22	4.2%	30	4.0%	3	1	5	12	0	0	0	9
あい	会	21	4.0%	9	1.2%	0	0	3	2	0	0	0	4
しり	知	17	3.3%	21	2.8%	0	1	3	6	0	0	1	10
かない	叶	17	3.3%	12	1.6%	2	0	1	3	0	0	0	6
はかり	計	17	3.3%	8	1.1%	0	0	4	4	0	0	0	0
たえ	堪	15	2.9%	88	11.8%	11	3	8	0	4	1	3	58
さり	去／避	15	2.9%	22	3.0%	0	3	9	3	0	0	2	5
しのび	忍	12	2.3%	58	7.8%	11	2	2	4	1	0	0	38
もうし	申	9	1.7%	3	0.4%	0	0	1	2	0	0	0	0
ほうじ	報	8	1.5%	3	0.4%	0	0	1	2	0	0	0	0
まぬがれ	逃	8	1.5%	2	0.3%	0	0	2	0	0	0	0	0
おさめ	治	8	1.5%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
および	及	7	1.3%	10	1.3%	0	0	5	4	0	0	0	1
あんどし	安堵	7	1.3%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
わすれ	忘	6	1.2%	59	7.9%	11	4	7	2	2	0	1	32
すて	捨	6	1.2%	35	4.7%	1	4	7	2	0	0	1	20
しんじ	信	6	1.2%	2	0.3%	0	0	0	0	0	0	0	2
わきまえ	弁	6	1.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
え	得	5	1.0%	5	0.7%	0	1	4	0	0	0	0	0
おさえ	押	5	1.0%	5	0.7%	1	0	2	2	0	0	0	0
うけ	受	5	1.0%	3	0.4%	0	0	3	0	0	0	0	0
かなえ	叶	5	1.0%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
となえ	唱	5	1.0%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
さだめ	定	4	0.8%	12	1.6%	0	3	3	1	0	0	0	5
とどめ	止	4	0.8%	6	0.8%	0	0	0	0	0	0	0	6
なり	成	4	0.8%	3	0.4%	0	0	1	1	0	0	1	0
ぞんじ	存	4	0.8%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
ぞんちし	存知	4	0.8%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
はなれ	離	3	0.6%	6	0.8%	0	0	0	1	0	0	0	5
とげ	遂	3	0.6%	4	0.5%	0	0	2	2	0	0	0	0
たのみ	頼	3	0.6%	3	0.4%	0	0	0	0	0	0	0	3
なし	成	3	0.6%	3	0.4%	0	0	1	2	0	0	0	0
うかび	浮	3	0.6%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
たもち	保	3	0.6%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0
きえ	消	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
ぞんめいし	存命	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
たすけ	助	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
なおし	治	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
ならべ	並	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
もうしはからい	計申	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
もち	持	3	0.6%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
もだし	黙	2	0.4%	6	0.8%	0	1	0	5	0	0	0	0
とり	取	2	0.4%	2	0.3%	0	0	0	0	0	0	0	2
あらため	改	2	0.4%	1	0.1%	0	0	0	0	0	0	0	1
しゃし	謝	2	0.4%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
わたり	渡	2	0.4%	1	0.1%	1	0	0	0	0	0	0	0
あきらめ	明	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
いれ	入	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
うしない	失	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
かきつくし	書尽	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
くわえ	加	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
しゅごし	守護	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
たて	立	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
ちらし？さんじ？	散	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
のせ	載	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
はたし	果	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
ほうじつくし	報尽	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
もくししわけ	黙止分	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0

やすみ	休	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
やぶり	破	2	0.4%	0	0.0%	0	0	0	0	0	0	0	0
こころえ	心得	1	0.2%	22	3.0%	0	1	5	1	0	0	0	15
はからい	計	1	0.2%	4	0.5%	0	0	3	1	0	0	0	0
みはなち	見放	1	0.2%	3	0.4%	0	0	0	0	0	0	0	3
ゆるし	許	1	0.2%	3	0.4%	1	0	0	0	0	0	0	2
そむき	背	1	0.2%	2	0.3%	0	0	0	1	0	0	0	1
たすかり	助	1	0.2%	2	0.3%	0	0	0	2	0	0	0	0
つき	尽	1	0.2%	2	0.3%	0	0	1	1	0	0	0	0
なおり	治／直	1	0.2%	2	0.3%	0	0	0	0	1	0	0	1
ふせぎ	防	1	0.2%	2	0.3%	0	0	0	2	0	0	0	0
むまれ	生	1	0.2%	2	0.3%	0	0	2	0	0	0	0	0
あらわし	表	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
おさまり	治／収	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
かくれ	隠	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
き	来	1	0.2%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0
きし	期	1	0.2%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0
じょうじゅし	成就	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
すすみ	進	1	0.2%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0
せめおとし	攻落	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
たてまつり	奉	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
たとえ	喩／譬	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	0	0	0	0	1
ちゅうし	注	1	0.2%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0
とどまり	留／止	1	0.2%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0
やみ	止	1	0.2%	1	0.1%	0	0	0	1	0	0	0	0
わかち	分	1	0.2%	1	0.1%	0	0	1	0	0	0	0	0

以下の85語は『鎌倉遺文』に1例用例が見え，〈別表2〉の他資料にはないもの。

あい（合），あらわし（現），あわせ（合），いき（行），いたし（致），いだし（出），いやし（癒），うけたまわり（承），うらみ（恨），おうじょうし（往生），おうりょうし（押領），おかし（犯），おくり（送），おこし（起），おし（押），おち（堕），おわり（終），かくし（隠），かずえ（数），かち（勝），きし（記），きょし（居），きんじ（禁），くいかえし（悔返），ぐつうし（弘通），けし（消），げちし（下知），こえ（越），こらえ（堪），ころし（殺），ささえ（支），さしおかれ（置被），さとり（悟），しとげ（仕遂），しゃしつくし（謝尽），しゅうぞうし（修造），しょうし（証），しょうめつし（消滅），すくい（救），すごし（過），あんどせしめ（安堵令），ぜひし（是非），そだち（育），そなわり（備），ぞうえいし（造営），ぞうへんし（造変），ちじし（治事），ちらし（散），つけられ（被付），つこうまつり（仕），つづき（続），とき（解），ととのえ（整），とぶらい（弔），どし（度），なされ（被成），のぞき（除），のべ（述），のぼり（登），は口？（？），ばつし（罰），はつし（発），ひるがえし（翻），ひろめ（弘），ふさぎ（塞），ふし（扶），ふちし（扶持），ふるまい（振舞），ぶんべつし（分別），へつらい（諂），へんじ（変），まかり（罷），むかい（向），むくい（酬），めつし（滅），もうけ（設），もうされ（申被），もうしのべ（申延），もうしわき（申分），もくしし（黙止），もちいられ（用被），やすめ（休），やり（遣），ゆき（行），わけ（分），

以下の134語は，『鎌倉遺文』に用例がなく，〈別表2〉の他資料に用例が見えるもの。数字は用例数。

あかし（明）3，あき（明）1，あくがれ（憧）1，あけ（開）1，あらそい（争）1，あらたまり（改）1，あらためられ（改）1，あらわれ（表）1，いい（言）6，いいいで（言出）1，いいつくし（言尽）1，いいより（言寄）1，いき（生）3，いだしたて（出立）1，いで（出）2，いでおわしまし（出在）1，いでき（出来）1，いなび（否）2，いましめ（戒）1，いり（入）1，うごき（動）1，うたがい（疑）1，うちおき（打置）1，うちすぎ（打過）1，うちすて（打捨）1，うちとけ（打解）2，うまれ（生）1，おき（置）3，おこたり（怠）1，おとしめ（貶）1，おぼしすぐし（思過）1，おぼしはなれ（思離）1，おもい（思）3，おもいえ（思得）1，おもいさだめ（思定）2，おもいしのび（思忍）2，おもいすて（思捨）6，おもいたち（思立）1，おもいはなち（思放）1，おもいはなれ（思離）4，おもいより（思寄）2，おもいわき（思分）2，おもむき（赴）1，おわし（在）3，かきとどめ（書留）1，かし（嫁）1，かぞえ（数）1，かたらい（語）1，かたりいで（語出）1，かよい（通）2，かんにんし（堪忍）1，きき（聞）1，きこえ（聞）2，きわめ（究）1，ぎょうじ（行）2，くち（朽）1，くらし（暮）6，くれ（暮）1，こめ（籠）1，ごらんじ（御覧）1，ごらんじすて（御覧）1，さしすぐし（過）1，さしはなち（放）1，さぶらい（侍）1，さめ（覚）1，しずまり（静・鎮）2，しずめ（鎮）7，しに（死）1，すぎ（過）3，すぐし（過）6，せき（堰）2，せきとどめ（堰止）1，せきとめ（堰止）3，そうし（奏）1，たずねいだし（尋出）1，たずねいで（尋出）1，たち（立）1，たちさり（立去）2，たちはなれ（立離）1，たっし（達）1，ためらい（躊躇）1，つぎ（継）1，つくり（作）1，つくろい（繕）1，つなぎ（繋）1，とけ（解）5，ととのおり（整）1，とまり（止）1，とめ（止）4，とりもうし（執申）1，ながらえ（長）1，なぐさめ（慰）12，なずらえ（準）1，なつき（懐）1，なびき（靡）1，にくみ（憎）1，ね（寝）1，ねんじ（念）1，のどめ（和）2，はき（分）1，はずれ（外）1，はなち（放）1，はべり（侍）2，ひ（干）2，ひきいり（引入）1，ひきすて（引捨）1，ひきわけ（引分）1，ふり（古）18，ふりいで（振出）1，ふりすて（振捨）2，ほどこし（施）1，ほりすてられ（掘捨）1，まいり（参）1，まうで（詣）1，まかせ（任）1，まぎれ（紛）1，まなび（学）1，みえ（見）2，みすぐし（見過）4，みすごし（見過）1，みすて（見捨）17，みたまえ（見給）1，めんじ（免）1，もてなし（為）1，やめ（止）1，ゆきすぎ（行過）1，ゆきはなれ（行離）1，ゆり（許）1，ゆるされ（許）2，よみ（読）1，よみすえ（読据）1，わかれ（別）3，わかれさり（別去）1，わき（分）2，

＊「鎌倉遺文%」欄は各上接語が『鎌倉遺文』全「がたし」の用例数（519例）中に占める割合を示す。「右A用例数計」と「右A%」も同様で，〈別表2〉であつかった諸資料全体における「がたし」の用例数と，それがその合計（745例）に占める割合を示す。

〈別表9〉

文書類	全仮名文書数（A）	「～がたし」の見える文書数（B）	（B）／（A）%	全形容詞数（C）	「～がたし」用例数（D）	（D）／（C）%	「～がたし」の異なり語数（E）
下　達	316	8	2.5%	424	12	2.8%	9
上　申	942	47	5.0%	1957	64	3.3%	31
証　文	1971	26	1.3%	1898	29	1.5%	21
書　状	2156	223	10.3%	7921	378	4.8%	137
神　仏	515	14	2.7%	666	36	5.4%	22
合　計	5900	318	5.4%	12866	519	4.0%	171

〈別表10〉

文書類	細分類	「～がたし」の見える仮名文書数	全仮名文書数	「～がたし」用例数	全形容詞数
下　達	下知状	4	31	7	99
	宣命	3	11	3	52
	定文	1	20	2	57
上　申	申状	21	109	30	291
	陳状	9	27	12	188
	請文	6	140	6	82
	注進状	4	88	6	225
	起請文	3	91	6	131
	奏状	1	1	1	9
	訴状	1	3	1	5
	勧進帳	1	4	1	16
	送文	1	55	1	9
証　文	譲状	12	891	14	1048
	置文	7	126	8	283
	事書	3	20	3	46
	売券	3	454	3	272
	去状	1	54	1	27
書　状	書状(日蓮以外)	126	1858	160	4728
	日蓮書状	97	298	218	3193
神　仏	願文	4	97	24	292
	寄進状	4	139	4	134
	告文	3	8	4	44
	回向文	2	11	3	130
	諷誦文	1	5	1	20

〈別表11〉

	鎌倉遺文	日記中世	随筆中世		説話中世		軍記中世	日記中古					随筆中古	史書中古	物語中古				
		とわず	方丈記	徒然草	十訓抄	発心集		土佐	蜻蛉	和泉	紫式部	更級	枕草子	大鏡	竹取	伊勢	平中	大和	源氏
がたし／接尾語	519	47	2	31	59	66	99	6	12	4	2	3	3	14	10	5	1	4	377
にくし／接尾語	9	2	1	6	3	2	0	0	1	0	1	0	13	5	0	0	0	1	90

〈別表12〉

文書類	「もうしつくしがたし」の見える文書数	「つくしがたし」の見える文書数
書　状	38（40）	37（37）
上　申	2（ 2）	2（ 2）
神　仏	0	0
下　達	0	0
証　文	0	0
合　計	40（42）	39（39）

（　）は用例数

〈別表13〉

「申つくしがたし」の対象となる感情	用例数
感謝	16
うれしさ	3
よろこび	2
不満、不快	2
あわれさ、とうとさ	1
いとおしさ	1
おどろき	1
かなしみ	1
こころぐるしさ	1
なごりなさ	1
恐悦	1
驚嘆	1
心もとなさ	1
不安	1
面目なさ、本意なさ	1
(前文欠のため不明)	1
書状末の定型句的用法	7